

『地域への女性参画と今後における活動の展望について』

平成二十五年十一月二十五日(月)、(公財)えひめ地域政策研究センターにおいて、当センター主催によるトークセッションを開催しました。当日はそれぞれの活動や問題点、課題など活発な意見交換が行われました。その模様をお届けします。

門田欣也氏



門田「皆さん、おはようございます。このトークセッションは日頃思っていること、世代を越えて伝えたいこと、地域に訴えたいこと、そういったことが拾い出せるように頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。」

増井「西予市野村町にある百姓百品という直売所に勤めている増井桃子と申します。今年の三月まで西予市の地域おこし協力隊として三年間活動をしていました。現在は、地域おこし協力隊の仲間と地域の商品を関東や北海道に販売するといった活動を続けながら、地域のお母さんたちの手仕事品を広める活動をしており、地域にお金落ちる仕組みをつくっていききたいと考えています。」

山内「愛媛大学法文学部総合政策学科 観

山内菜摘氏



光まちづくりコースの山内菜摘と申します。私は高校三年生の頃に『はーと・ねっと・くらぶ』で障がいを持ついる子どもたちと健全な子どもたちが合同でキャンプをする『あいあいキャンプ』という活動を経験し、現在は『まちづくり!!まつやま新聞』という松山のことを紹介している新聞で、副編集長として二年程やらせてもらっています。大学では、流通論や地域商業論などを学んでいます。」

大川「平成二十一年に『創造アトリエ あぶりこ』を創設し活動しています。このアトリエは、地域の人の居場所、また、子どもに造形活動を楽しんでもらえる場所になつたらいいなと思います。祖父の空き家を改造して活動を始めました。現在は、公民館や放課

【コーディネーター】

門田 欣也 (愛媛県男女共同参画センター 係長)

【参加者】

山下 由美 (宇和島市：企業組合津島あぐり工房 代表理事)

大川 理恵 (伊予市：創造アトリエ あぶりこ 代表)

増井 桃子 (西予市：百姓百品 株式会社)

山内 菜摘 (松山市：愛媛大学法文学部 3 回生)

渡部 恭久 (えひめ地域政策研究センター 主任研究員)

後の児童活動にも行ったりしています。」

山下「宇和島市津島町にある企業組合津島あぐり工房の山下由美と申します。農家に嫁いで就農し、農家女性には労働力に見合う収入が得られないのが、直面した課題でした。それで同じ悩みを持つ仲間と一緒に副業として『農産加工施設 津島あぐり工房』を平成十五年に立ち上げました。地域伝統の食文化を残す、農家女性として経済的に自立するという目標を立てて、十年経つ頃に次の目標として、米の普及拡大を掲げ、宇和島のきさいや広場に『手作りパン工房みなみ』の立ち上げにも関わりました。三年で任期が切れ、津島あぐり工房の加工施設と店舗部門を立ち上げ、『あすも』という名前のお店で活動し



トークセッション

大川理恵氏



大川「自分が生まれた地域であつても、大きくなつてから飛び込むと、なかなか理解は得られなかつたですね。それを四年続け

ています。」
門田「ありがとうございます。大川さんは、アトリエという形で地域に入っていたわけですね。自分たちが抱いていた夢を達成するために一生懸命頑張る力も女子力。経済的にも力をつけていくというのも女子力。女子力の定義って無いんですけども、そういう意味で昔からのご自分の夢を形にしたわけですね。それと地域の関係なんですが、これを地域に広げていこうとか、自分の力が地域に役立ったらという思いはもちだつたんですか。」
大川「地域への思いをはっきり持つようになつたのは海外に行ったときです。一人で知らない土地に行つて、そこでうまくやつていくには、やっぱり地域の人とうまくやつていかないとできないんだなと思ひました。帰国後も、自分がしたいことは地域の人の協力を得ないといけないと思つて活動しています。」

門田「海外から伊予市へと活動の場所が変わつたわけですが、『自分はこんなことをしているんですけど、皆さん協力してくれますか』というような発信をするときに、苦勞されたことはありますか。」
大川「自分が生まれた地域であつても、大きくなつてから飛び込むと、なかなか理解は得られなかつたですね。それを四年続け

ていつて次第に私のやつていることを周りの方にわかつてもらへるようになっていきましたね。やつぱり、地域の方には言われるんですけど『はじめのころは、あんたが何をやりたいのかさっぱり分からなかつた』と。なにか、きつかけとなるイベントがあつたみたいで。それから、なんかこう、『理恵ちゃん、価値も分かつてくれるようになったんやね』と公民館の館長さんも言つてくれて。今後、継続して無理をしないことが、自分は力なんだろうなと考えていて、続けていくということ念頭に置いてやつていきたいなと思つています。」
門田「情報発信ということでは、山内さんは、まちづくり松山新聞の活動を通して見えてくるモノって何かありますか。」
山内「取材先は、農業、イベント、祭りの主催者など様々ですけど、情熱がある方がこんなにも松山に溢れているのかつていうのが一番驚きましたね。女性と男性の違いでいうと、例えば一つのイベントをするとなつたら、男性が大まかな枠組みを決めて、その中のすこ細やかなことや面倒を見てくれるのは女性の主催者さんが多いという印象が強いですね。」

門田「それについていろんな地域の凝縮された形ですよ。山下さんにお聞きしたいんですが、津島あぐり工房を立ち上げて活動される中で、越えなければいけない山というのがいくつもあつたと思うんですが、お聞かせいただけますか。」
山下「労働力に見合う収入が得られないつていうふうに気付いた時に、農家女性として何ができるか、自分の役割は何かと考え始めたんですね。その結果、自分の場合は、農産加工だといふことに気が付きました。それと同時に自分が主体的にする農業を始めようというところで両親とは離れて施設園芸（野菜作り）を始めました。そこで得た収入つていうので日々喜びを感じながら過ごしていました。同時に農産加工もやつていたので、少しずつ自分の目標を形にできたんですけど、やりたいことが形になればなるほど、男性よりも女性に足を引っ張られるというか、叩かれるというか、そういうことがあつたので、いつかは地域の中で認められる存在になろうというのが私の一つの目標になりましたね。平成十九年にJICAの専門家として、タイに渡つて仕事をしたんですけど、日本人が忘れていくゆい精神」というのがタイには残つていたんですね。地域、家族のつながりがゆるぎないということを感じて帰ってきました。日本人は豊かになつてきているけど、大切なものを忘れていく。そういう地域とのつながりができる場所をつくりたいというのが一つの目標となり、『あすも』に繋がってきたわけです。津島あぐり工房は、同じ思いを持つている仲間四人で立ち上げ



ました。しかし、四人で始めると、温度差が出てきてまとまりにくくなる。会社の形で言うと、一人のトップがいて賛同してくれるブレーンがいてっていう、そういう形がいいと思う。やっぱり同じ思いを貫いていくと、かならず助けてくれる人が現れてきて、それがどんどん広がって、気が付けばすごい事になっっているっていうのをここ一年で実感しています。」

門田「なるほど。ちょっと話が変わりますが、増井さんは先ほど『地域の手仕事品』を広めていきたいと言われていましたね。そのために地域のひととどのように関わっていましたか。」



増井「すごくいい物を作っているのにボランティア精神の方が強くて、商品に見合う対価が付けられていなかったことに、すごくもったいない」と思いましたね。自分たちで金額設定

をするのはなかなか難しいようで……。でも、しつかり金額設定をすることで、良い商品づくりに関わって、結果的

にいろんな面で向上していくので、私にしかできない『ヨソ者目線』を用いながら一緒に金額設定もしながら商品づくりなどをしました。」

門田「山内さんは今後、大学を卒業し、就職されるわけですが、おそらくこの増井さん、山下さん、大川さんのいろんな生き方っていうのは一つの参考になると思うんです。地域

で活躍する女性にこういうことを聞いてみたいというのはありますか。」

山内「山下さんが言われていたとおり、経済的な自立というのが本場に女性にとって大切なことだと思うんですけど、出産や子育てをして、その後の社会復帰がキツチリとできるような時代なのかなっていうのが、すごく気になる場所ではありますし、地域で活動されていることが自分の生活の弊害になったりとか、そういう問題をどうやって乗り越えていращしやるのか伺いたいです。生活と地域活動のバランス、いわゆる両立ができるのかどうかっていうのは興味がありますね。」

山下「私は、両親から離れて自分の農業をやりたいと思ったときに、まず、家族で話し合いました。うちは今考えると家族の中で小さな小さな男女共同参画社会ができていたのかなと思います。でも、それまでに自分も努力して、家庭の中での自分の役割を一生懸命果たしながら、自分の主張もしてきたところ、私がいつも気にかけていたこと、す。バランスというのものはすごく大事ですね。いろんなところに出かけて行かないといけない場合もあるんですけど、そんな時は直感ですね。家族の様子を見て『ああ、今回はやめよう』とか『今回は行かせてもらおう』とか、そういうバランスを取りながら子どもが小さい時にはやってみましたね。結構そういうのが大当たりするんですよ(笑)」

門田「本場に直感とか閃きっていうのは大事だし、バランスも非常に大事なんですよ。女性ってそういう意味で本場に力を持っていると思います。やっぱり、主張するにしても、その主張の内容と、要はタイミングが重

要だと思うんですよ。大川さんは、今後、こんなふうに地域に関わっていききたいという思いはありますか。」

大川「私の理想としては、日本の昔の文化でもあったような、地域の人が、思いやりの掛け合いじゃないけれども、迷惑をかけても構わないよっていうような地域のつながりをつくっていったらいいなと思っています。自分の住んでいるこの地域で、ずっとやっていくたら、もっと広がりを持っていくんだらうなと思っています。」

門田「やり始めたきっかけはそれぞれ違うと思いますが、やり始めて、最初はこんなことを想定していたけど、それ以上にこんないいことがあった、こういうことに気が付いたっていうことはありませんか。」

山下「私は、農家女性としての経済的自立と、子どもたちに伝統の食文化を残すというふたつの目標を立てたんです。今は、それが逆転していて、食文化を残すことで、行く行く





トークセッション

山下由美氏



は、自分の懐が豊かになればいいかなと思っています。そして、その食文化を残すためには、地域の中で『あすも』がどういった働きをすればいいのかなとも考えていて、やっぱり、地域の雇用だとか、そういうことを結構考えています。特に、まだまだ働ける高齢者、障がい者、その人たちを雇用すること、で、食文化を継承することにつながっていったらいいなというふうに、今、結構いい流れが起きます。」

門田「始めたきっかけは、自分で使えるお金が欲しい、つまり、経済的自立ということだったと思うんですけど、今は逆に、地域から力をもらっているということですね。」

山下「私は、ものすごくやりたいけれどもできない状況にある農家女性の友達をたくさん知っているんですよ。この津島あぐり工房を立ち上げたときに、そういう人のモデルになりたいというふうに見えるんです。農家女性だってやればこんなことだってできるんだよっていうのを、身をもって伝えたいなと思ったのがひとつありましたから。ただ、農業をやりが、副業として農産加工施設を同時に進めていくというのは、専業ならなかなかできなかったかなというのは感じています。」

業の方ができそうな道筋というのは、何か、今、考えられていますか。」

山下「専業だとできることは、やっぱり今、法的整備がされてる6次産業化ですよね。あいうのは専業だからできることなので、そういうこともできるよというのは、示してあげられると思います。」

渡部「行き詰まっている感じがしている方って結構いらつしやると思うんですね。こういう道もあるんだよと示してあげられる可能性もあるかなと思います。」

山下「そういう役割っていうか、自分で勝手に決めて、そういう役割は自分にあるなっていうふうには、いつも思いながらやっています。」

渡部「仲間づくりという点ではどうなんでしょう。みなさんのところに同志は集まってきたいらつしやいますか。」

大川「私は夏と冬に子どものキャンプを企画しているんですが、大学生が有志で手伝いに来てくれていて、それが4年間ずーっと来てくれています。卒業して社会人になっても来てくれるから、すごいなと思っています。」

門田「今、本当にたくさん女性の地域おこしに関わっていますよね。これまでは、いろんな女性の生き方、地域への関わり方、そういったモデルがなかった。だけど今は、モデルを知ろうとしてもなかった地域で知ることが出来る。やっぱり、仲間集め、ブレインをつくるっていうのも、本当に大事なことで、男でも女でも関係なく必要なことですよね。だから、自立はいいけれども孤立はしないように、仲間をつくらせて、きちんとしたブレインをつくりながら、人脈を築いていって、自分



のスタイルを確立していく。あとはもう、どんどん発信していくってほしい。地域おこしをやっていると、逆に地域が還元してくれる。それでまた自分も大きくなるし、地域のためにもなってくる。地域の雇用の面だとか、経済的な発展とか、お互いが持ちつ持たれつの関係になるまで継続して地域おこしをやっていれば、必ず、その地域は発展すると思います。そういう人たちがいること自体、地域おこしだと、僕は考えています。ぜひ、頑張っていただけたらと思います。今日は大変おつかれさまでした。」

全員「ありがとうございます。」